

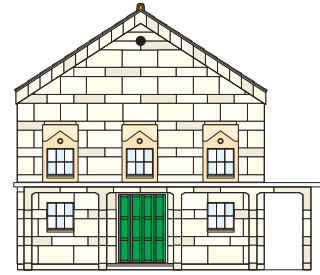
Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2018-11-01

APM news 201

秋山孝ポスター美術館 長岡

国の登録有形文化財・長岡市都市景観賞受賞・金庫扉と雁木のある美術館



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第42回美術館大学 7月7日(土)pm3:00~pm4:30 / 参加者:36名 / 講師:秋山孝

「秋山孝の神秘4『印刷すること』『手描きすること』について2」



当テーマにおける前半にあたる第41回美術館大学では、時代と共に普及した印刷メディアが秋山に与えた衝撃を振り返りながら、印刷メディアの魅力について学んだ。後半の第42回美術館大学では、技法の面から具体的に「印刷すること」「手描きすること」を考察した。

まずオランダの画家・モンドリアン(1872-1944)の表現に遡る。モンドリアンは樹をモチーフとした連作を制作している。その連作で描かれる樹木は、写実的な表現から徐々に直線で構成した表現に変化していった。それは、樹木のもつ構造を研究し、形態を単純化していく、まさに抽象的表現への過程が見て取れる。

次にジョルジュ・スーラ(1859-1891/フランス)が提唱した点描主義を考える。スーラは「輪郭線で描かない」ということを発見した。それまでの絵画は輪郭線で描くことが当たり前であったが、確かに実際の世界には輪郭線というものはない。彼は光学と色彩の理論を学び、点で描くことを見つけ出した。今でこそ受け入れられている考え方であるが、当時は相当なセンセーショナルな発表であったに違いない。その当時の衝撃に負けない位の衝撃を秋山は受けた。これまでの「秋山孝の神秘」シリーズにおいて、スーラは幾度も登場していることから、秋山の表現研究における影響力の高さがわかる。

また、秋山は水墨画にも独自の考え方をもつ。秋山は水墨画は「染み込むことで描く技法」と説明する。和紙の繊維の目に墨が引っかかり残った点の集まりで描かれていると考える。水墨画とスーラの点描主義が繋がるということに意表をつかれた。そして、この「点で描く」ということが、秋山の「印刷すること」につながっていく。

印刷物も網点という点の集まりで構成されている。印刷物を拡大すると、小さな点がたくさん印刷されているのがわかる。この点の大きさ、密度、重なりと地となる紙の関係で図像や色彩を形成している。日本には明治時代初期に石版印刷技術が導入され、B1サイズという大判の大量印刷が可能となった。橋口五葉や杉浦非水などによる三越呉服店のポスターがその代表例だ。当時の印刷技術はとて高く、現代でそれを再現するのは容易ではない。当時の日本の職人は紙の扱いに長けており、紙とインクに関する知識が豊富であったため、高度な印刷技術が可能であったのだと秋山は語る。この印刷技術が後にオフセット印刷へと発展していく。

更にコンピューターの出現によって、印刷による表現の方法が大きく変わる事となる。コンピューターに必要な数列・情報を入力することのみで制作が可能となった。しかしながら、そこにはれっきとした美術家の意識は存在している。この大きな変革にも秋山は衝撃を受けた。

前述でコンピューターは数列での表現であると触れたが、それにより手描きでは困難を要する楕円やベジェ曲線といった整った図形の描写が容易となった。しかし、それに秋山は美しさを感じない。整ったものを壊すことで美しさが生まれる。コンピューターという技術を利用しながらも、それを壊すことで秋山独自の魅力的な表現を生み出したのだ。(過去の「秋山孝の神秘2『点と線』～形を失う形の思考～」でより深く考察した。)

秋山は、現在の表現方法に辿りつくまでに様々な画材、技法での表現を研究してきた。時代と共に画材も変化し、表現も変化してきた。これまでみてきたように、秋山にとって印刷という表現技法も、画材による表現の移り変わりの延長線上にあるのだ。「印刷すること」「手描きすること」は一見対極に位置するように思われるが、秋山の表現活動の上では密な相互関係にあることがわかった。(たかだみつみ・APM学芸員)